

「お受験」言説の社会学

一階層論の視点から見た幼児受験への社会的視線一

小針 誠(東京大学大学院)

1. 問題関心

「お受験」という言葉はいまや幼稚園・小学校受験の代名詞になっている。この言葉は、1994年に放送されたテレビドラマに登場以来、マスコミはじめ一般の人々たちの間にも広く共有される言葉となった。

ところで、この「お受験」という言葉は非常に珍妙な言葉である。「お受験」という言葉は、対幼児の丁寧語であると同時に、揶揄表現でもあるといえる。実際に国立・私立小学校を受験させようとしている保護者の約 20%は「過去に小学校受験を子どもにさせることをバカにされた経験がある」という。

たかだか受験がなぜ揶揄の対象になるのだろうか。ある本では幼児受験の意味を以下のように述べている。「お受験は“階級闘争”です。少し大げさですが、お受験をするご家庭、特にご両親自身にお受験の経験がない層の人々は、お子さまのお受験を成功させることで、クラスの階段を一気に駆け上がろうと躍起になっています。つまり、お受験は“人生のリセットボタン”なのです」(末木佐知+コマダムネットワーク 1997:66)。

また同書は過去との対比を通して、小学校受験者層の変容を以下のように述べている。

「私立小学校というのは、同じ上流階級のご子息・ご令嬢だけが集まる、とても閉鎖的な学び舎だったのです。少し前までは……。」(末木佐知+コマダムネットワーク 1997 前掲:203)

こうした「お受験」という表現は、詐欺事件の被害に遭ったり、子どもの受験にのめり込む母親たちを批判・揶揄した言葉であると同時に、そもそも幼児受験にふさわしい階層ではない(とイメージされる)人たちが「お受験」ゲームに参入し、社会的上昇移動を遂げようとしていることへの揶揄の〈まなざし〉なのではないだろうか。

このように捉えたとき、幼児受験と階層問題は、単に受験層の階層上の特徴を捉える視点ばかりではなく、それら受験層への社会的視線も含めて

考察される必要があるように思われる。我が国では階級・階層意識が希薄化したと指摘されて久しいが、なぜ幼児受験では親職(階層)の問題が注目されるのか。こうした幼児受験と社会階層の問題はマス・フラストレーションとしての「階層言説の社会学」という新たな問題設定を可能にする。それを通して現代の日本人のマス階層意識まで迫ることができるのではないだろうか。

2. 昨今の雑誌に見る幼児受験層の社会階層

大衆週刊誌が相次いで幼児受験に注目し、その社会階層を論じるようになったのは大凡 1987年あたりからである。これはNHKテレビドラマ「お入学」が放映されたことを契機にしたものと考えられるが、この時期以降の幼児受験と社会階層言説をまとめると以下になる。

[表 1] 幼児受験者・有名幼稚園小学校在学者に関する階層言説(1987年～1999年12月)

受験者・在学者の親(父)職	芸能人、政治家、財界人、梨園、医師、歯科医、普通の(一般的・平均的・)サラリーマン(家庭)、会社役員(会社社長)、スポーツ選手、資産家、弁護士、会社経営者……など
階層関連のキー・ワード	裕福な家庭／上流／名家／伝統ある家柄／大衆化／猫も杓子も／底辺に拡大／いろんな家庭／成り上がり／アッパー階層に這い上がろうとする新興勢力／……など

[註] 大衆週刊誌 156 点よりピックアップした

上表によると、マスコミの論じる小学校受験は「普通のサラリーマン」家庭が参入することで「猫も杓子も」お受験し、「大衆化」したという。実際に「大衆化」したのかについて、報告者が行った質問紙調査の結果から確認してみよう。

3. 実際の幼児受験者層の社会階層・地位

実際の幼児受験者層の社会的地位は下表(クラスター分析の結果)で示されるとおりである。

〔表 2〕小学校受験層の階層クラスターの構成

階層 クラ スタ	構成 (%)	階層センター				
		世帯 収入	父学 歴	父職	平均	分散
A	76.1	4.92	4.99	4.82	4.91	0.01
1	7.0	4.94	2.38	4.91	4.08	2.16
2	1.7	4.88	2.38	2.63	3.30	1.90
3	5.4	3.50	5.00	4.12	4.21	0.57
4	7.6	4.57	4.95	2.62	4.05	1.56
5	2.3	3.18	2.18	3.27	2.88	0.37
計	100.0	4.33	3.65	3.73	3.90	1.09

〔註〕同表は中途集計段階の結果である。

このように多くの小学校受験家族は「上層一貫クラスター」(A)に属していることが確認される。

4. 「大衆化仮説」の誤謬

上層ホワイトカラー層間で展開される幼児受験がなぜ「大衆化した」と誤認するのだろうか。

(1) 過去の報道とイメージの形成

幼児受験は、それ以前の大衆雑誌の言説を通して、「上流・一流階級」(しかもその上流イメージが皇室と結び付けられる)限定とするイメージを形成した。それは一部の私立小学校(特に学習院幼稚園・初等科)にのみ言及することで、「幼児受験は上流階級に限定されたもの」とするイメージを規範化したことでもある。

〔表 3〕幼児受験者・有名幼稚園小学校在学者に関する階層言説(1950年代～70年代)

受験者・在学者の 親(父)職	皇室、政治家、財界人、(一流どころの・一流企業の)サラリーマン(家庭)、会社役員、大学教員、資産家、弁護士、会社経営者……など
階層関連の キー・ワード	華族／上流家庭／上流階級／社会的に地位の高い人／上流社会／親は一流大学を出て経済的に余裕のある家庭……など

〔註〕大衆週刊誌 33 点よりピックアップした

確かに学習院初等科は、戦前の学則によると、基本的に入学者を華族に限定していたが、戦前期の多くの私立小学校入学者はホワイトカラー層(新中間層俸給職)で占められていたことが先行諸研究でも明らかにされている(成城小学校については門脇・北村 1990)。従って、小学校受験は上層ホワイトカラー層が主力であり、入学考査を巡っては上層ホワイトカラー層間の葛藤・競争であることに今も昔も基本的には変わりはないのである。しかし、戦後の高学歴化とそれに伴う職

業構造の変容は、ホワイトカラーの「選抜度指数」を大きく低下させた。昭和初期に入学試験が導入された頃の成城小学校のホワイトカラー選抜度指数は 5.2(成城小学校入学層と東京府内の専門・事務・保安との比-1930 年)であるのに対して、現在の小学校受験者層のそれは 2.3(小学校受験層と東京都内の専門・管理・事務との比-1995 年)である。つまり、ホワイトカラー層の増大に伴う「選抜度指数」の低下は、それまでの「一流のサラリーマン」が「ふつうのサラリーマン」として人々の目に映るようになってしまったのではないだろうか。社会においてホワイトカラー(専門・管理・事務)が増大すれば、ホワイトカラーが私立小学校に入学する稀少性は大きく減じるのである。ゆえに、国私立有名幼稚園・小学校を受験する予定の上層ホワイトカラー層が「ごくふつう」に見える(まなざし)はごく自然のことと言えるのではないだろうか。

(2) マイナーな層への注目

これは非一貫の社会的地位に属するクラスターや地位指標が「ふつう」のクラスターに当てはまる小学校受験家族のみを取り上げて論じること、大衆化イメージが形成されたとする見方である。すなわち、幼児受験の大衆化イメージは、地位が一貫していない(とみられる)特定の社会集団の国・私立小学校志向が社会的に大きく注目されるようになったことが挙げられる。その最たる集団が芸能・スポーツ関係者であろう。1980 年代以降、大衆女性週刊誌は、芸能・スポーツ関係者子弟の幼児受験・有名幼稚園・小学校入学を芸能記事として大きく取り上げるようになった。この芸能・スポーツ関係者といった社会集団は収入が高くても、必ずしも学歴が高いとは限らない。むしろ芸能・スポーツ関係者は学歴と無関係な業績主義、または梨園のように学歴とは無関係の極端な属性主義が重視される傾向が強い。

(3) 産業化仮説の誤謬

幼児受験の「大衆化仮説」は、教育機会とは基礎財であり、産業化の進展とともに、広く開かれるという産業化仮説が前提となっている。基礎財・上級財の価値判断は飽くまで相対的なものであり、たとえば高校進学率に見られるように、大衆化・普遍化の進行とともに、かつての上級財は基礎材へと変容する。しかし小学校受験に限って言えば、飽くまで「上層ホワイトカラー層」の特権であることには今も昔も変わらないのである。